10 代水泳選手のパラスポーツ直接観戦と意識変容

－国際大会派遣レース参加者を対象に－

瀬川　海（滋賀大学）

１．目的

本研究の目的は、パラリンピック水泳の直接観戦が 10 代水泳選手の障害理解に及ぼす要因について検討することである。

２．研究方法

第 39 回 JSCA ブロック対抗水泳競技大会に参加する 10 代水泳選手と指導者 750 名を対象に質問紙調査を行った。回収数は 471 名（回収率 62.8%）、そのうち指導者を除いた選手の完全回答者 312 名（41.6%）を有効回答とした。調査内容は、性別、学年、身近な障害者の存在、パラスポーツの間接観戦経験、パラスポーツの直接観戦経験、パラスポーツ経験、障害者と接した経験に関する項目に、障害理解に関する意識 20 項目を加えた。障害理解に関する質問は、藤田（2003、2013）・角田ら（2018）の障害者・パラスポーツに対する意識を参考に作成した（5 点リッカート尺度「全くその通りだと思う」1 点、「全くそうは思わない」5 点）。パラ水泳レースはエキシビションレースという形で行われた。調査票の記入はパラ水泳エキシビションレースの観戦前・後に行った。情報提供の方法として回答者には事前にパラ水泳に関するパンフレットを配布している。さらにレース前にアナウンスを通したパラ選手の障害に関する説明やクラス、過去の成績紹介を行った。

３．結果と考察

観戦前の回答 20 項目に因子分析（最尤法・プロマックス回転）を適応しまとまりを確認した。その結果 4 因子が抽出され「パラ水泳の競技性に対する理解」「障害者のスポーツ実践に対する理解」「パラ水泳のインクルーシブ性」「障害者に対する親近感」（クロンバックα：0.725～0.823）と解釈した。その因子ごとに下位尺度得点の合計点を算出し観戦前後で比較した結果、観戦後に 4 因子すべての得点が有意に上昇した。つまり、パラ水泳の直接観戦は肯定的な影響を与えていた。次に 4 因子それぞれについて、対象者の関連要因ごとに二要因分散分析を行った。「障害者のスポーツ実践に対する理解」ではパラスポーツの経験と観戦前後の交互作用を認めた。観戦前後の主効果のみが有意であった。観戦前後の単純主効果はパラスポーツ経験のあり群なし群ともに有意であり、あり群の上昇率がなし群より高かった。さらに、「パラ水泳のインクルーシブ性」について、パラスポーツの経験と観戦前後の交互作用を認めた。観戦前後の主効果のみ有意であった。観戦前後でのパラスポーツ経験の単純主効果は観戦後のみ有意であった。また、パラスポーツ経験の有無において、観戦前後の単純主効果はあり群なし群ともに有意であった。あり群の方が得点上昇率は高かった。

以上より、パラスポーツ体験の経験に観戦経験が加わったことが障害理解を促進させたと予想する。今回、水泳選手と同一種目の観戦であることからパラ水泳選手へ共感が得られやすかった可能性がある。よって、一緒に障害者と運動ができると実体験から想像しやすかったのかもしれない。加えて、障害者が水泳に取り組むことの意義を認めたのだろう。また、本大会では障害区分の説明などパラ水泳のレースの特徴が解説された。このことが障害理解の得点上昇に寄与したと考えた。本研究で得た知見はパラリンピック教育等の障害理解にも援用できるだろう。児童・生徒の障害者への合理的配慮を育む一助になる可能性が高い。

４．結論

10 代水泳選手の障害理解は、過去のパラスポーツ体験経験にパラ水泳観戦経験が加わったことによって、さらに促進される。